

# 隠岐三型アクセントの再検討

## A review of Three-pattern Accent Systems in Okinoshima

児玉 望

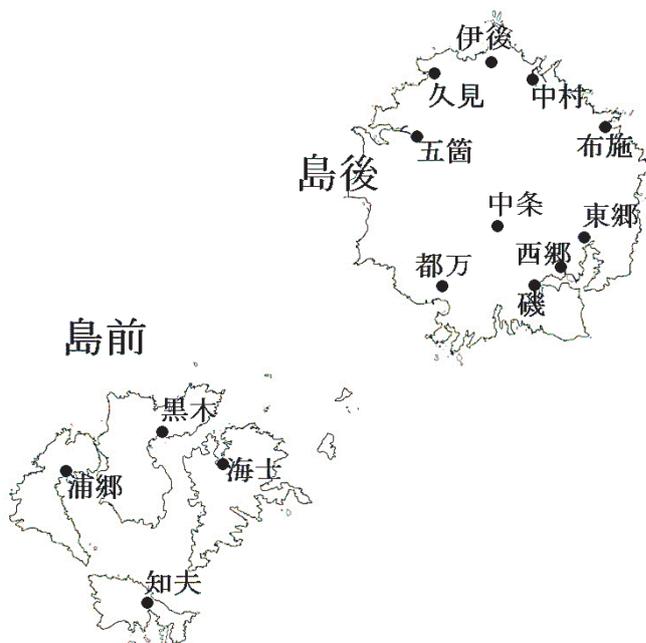
KODAMA Nozomi

### 1 はじめに

隠岐諸方言のアクセント体系の記述としてもっとも詳しいのが、島根・鳥取両県の全域にわたり、名詞とその文節形・動詞と形容詞の各活用形・副詞についてのアクセント変異を記述して、中国・出雲・隠岐の3種に大別した広戸惇・大原孝道(1953)の著作である。このうち、隠岐アクセントについては、さらに、五箇(旧五箇村・都万村・中村)・浦郷(旧浦郷町・黒木村・海士村・西郷村・東郷村・布施村・中条村・磯村)・知夫里島(知夫村)の3つに下位区分する。このうち、五箇と浦郷は、品詞に関わらず「二音節以上の語には概ね三種の型」があり方言間での型の対応が見られ、知夫ではこのうち二つの型の区別がないとする。この対応から窺われる諸方言間の系統関係について、金田一春彦(1972)は、自身の調査結果を加えて、浦郷タイプのうち海士村のアクセント体系が隠岐の祖形に近いとした上で、隠岐内部での系統分化と中国・出雲アクセントとの系統関係の両方についての再建案を提示した。

一方、重起伏(二箇所のHの卓立)を含む複雑な音声実現形をもつ五箇村久見方言の音韻解釈をめぐっては、服部四郎(1973)以降、「アクセント核」をどう考えるかを中心に、新しい理論的提案が次々に提出された。この中で、文節アクセント的性質を中心に、多型アクセントと対立する類型として提案された上野善道氏の「N型アクセント」と、「位置」のアクセントに対する「種類」のアクセントとして提案された早田輝洋氏の「語声調」は、共に九州西南部の二型アクセントや朝鮮語の一部の体系を含む類型として隠岐の「三型アクセント」を位置づけるものである。

筆者は、児玉(2015)において、「語声調」を多音節声調(メロディー)と「境界特徴」と



してのピッチ変位の組み合わせとして定義した上で、九州西南部の二型アクセントが、名義抄式アクセント以前の語声調（「原平安アクセント」）が経たと考えられる「アクセント核の獲得」を経ていない、とする系統分化の仮説を提案した。二型アクセントの語声調的性質を、「残存形」とみなす仮説である。この仮説では、九州西南部の二型アクセントで起きた型の統合は、原平安アクセントの声調型の分裂を引き起こさないで進行した、と考える。二つ例を挙げる。

(1) a. L+類（名義抄 -3 類・ -3 類・ -4 類）はすべて B 型。

b. L+H 類の動詞・形容詞は活用形を含めすべて B 型。

(1)a-b は、豊前式以外の九州諸方言のアクセント体系に共通して分裂のみられない型の統合であり、これをもって、これらの諸方言では本州・四国でアクセント核の位置対立をもたらした「連低式の高起化」を経ていないと考えた。

これに対して、隠岐の三型アクセントでは、このいずれでも型が分裂している。隠岐の三型は、さまざまな呼称があるが、本稿では上野善道(2012)の A-C<sup>1</sup>を、「～系列」と表記し、必要に応じて引用文献との対応を示すことにする。

(2) a. 「目」 -3 類 (C 系列)、「米」 -3 類 (B 系列)、「男」 -4 類 (A 系列)

b. 「よい」(C 系列)、「熱い」(B 系列)、「熱う」(C 系列)、「熱かった」(A 系列)、「貧しい」(A 系列)、「書く」(C 系列)、「書かん」(B 系列)、「起きる」(B 系列)、「起きん」(B 系列)、「起きた」(C 系列)、「歩く」(B 系列)、「歩かん」(A 系列)、「歩いた」(B 系列)、「喜ぶ」(A 系列)

(2)b の分裂は、(2)a の文節の音節数を条件とする分裂に加え、東京方言における「起き」/「起き」の核の位置対立と同様に、名義抄式体系における用言活用形の無核（連体形）と有核（他の活用形）の型の区別を保持していることに結び付けられる。これらを含め、(2)の分裂は、名義抄式アクセントの低起式において語頭の L が 1 個であったものが隠岐の C 系列、2 個であったものが B 系列、3 個以上であったものが A 系列に対応するのが原則、と考えれば説明しやすい。語頭の L が 2 個以上の低起式に対応する B 系列と A 系列は、それぞれ名義抄式の高起の型をも含んでいる(B 系列： -1・2 類、 -2 類、 A 系列： -1 類、 -1・2 類)ので、隠岐アクセントでは「連低式の高起化」が起きたと考えなければならない。

「N 型アクセント」はアクセント類型であり、系統分類ではないため、経てきた通時変化の過程に起因するとみられる特徴の違いがあることは上野善道(1984)にすでに指摘があ

---

<sup>1</sup> 上野(1989)までの a-c(A-C)とは順序が逆になることに注意が必要である。

るが、筆者が提案する「語声調からのアクセント核の獲得」という類型変化の仮説では、次の二つの可能性のどちらが正しいかを検討しなければならないと考える。

(3) a. 隠岐アクセントは「連低式の高起化」によりアクセント核の位置対立獲得を経て一旦多型化したあと、型の区別を失って三型となった。

b. 隠岐アクセントでは「連低式の高起化」によりアクセント核の位置対立が生まれなかった。

(3)a、つまり、N型アクセントが多型アクセントから発生した、とするのは、通説の考え方である。たとえば、隠岐アクセントの祖形に「中国方言の祖形に雲伯方言の性格を少しまじえたようなもの」を想定する金田一(1972)では、A系列の経た変化として、無核の語と語末側に核のある語の区別が失われて、さらに語頭側に核が発生したとする変化を仮定する。逆に、語頭側に核が発生する変化を先に仮定すれば、語末側の核の位置による弁別がその段階で失われることになり、仮定しなければならない変化の数を減らすことができると考えるが、いずれにしても、通常の多型から、可能な位置対立の数を減らして三型化したとみる分析である。三型類型として、これらの体系の「アクセント核」がもっている、たとえば助詞側に実現するというような特徴は、三型化したことによる改新だと考えることになる。

金田一(1972)の系統分化の論証は、「隠岐アクセントが(前代)近畿アクセントに由来するか、中国アクセントに由来するか」という論点を中心に展開されており、このどちらでもない可能性、つまり、名義抄式に近い体系から他の中国方言とは異なる独自の変化が起きたという可能性が十分に検証されていない。

一方、上野(2012)は、「本土アクセント祖体系」から隠岐のアクセント体系を直接に派生する仮説を提案している。この本土アクセント祖体系は、名義抄式の高起無核型に代えて下降式を仮定するものであるが、他の「有核」の型に関しては名義抄式と同じ形であり、N型アクセントが「本来」多型の体系から発生したという説であるといえる。ただし、3音節までの名詞の類に議論が限られているため、三型以外の型を想定しておらず、なぜ三型にとどまるのか、たとえば、LLLLHやHHHLのような音形をもっていた動詞はどうなったのかは説明されていない。

(3)bは、上に述べた「連低式の高起化」が、同じくこの変化を経たと考えられる中国方言や近畿方言とは異なる経過をたどった、とする仮説であるが、これは名義抄式に近い、まだ語声調的性質を残していたと考えられる段階からの変化である。本稿では、まず、名義抄式体系に近い段階から隠岐アクセントが分化したのだとすれば、どのような改新があ

ったと考えられるかを検証して(3)bの可能性を検討するために、広戸・大原(1953)のデータを再検討する。(第2節)児玉(2015)で提案した、波状的な変化の考え方も取り入れて、地理的に近い山陰地方のアクセントで起きた変化が波及している可能性も検討する。(第3節)

もうひとつ検討しなければならない点は、児玉(2015)で提案した「語声調」の類型的特徴が、隠岐のアクセントにも当てはまるかどうかである。筆者は、「語声調」は多音節声調のメロディー型と境界特徴の組み合わせであり、ピッチ変位の位置は「アクセント核」とは異なり固定しておらず、「異音」的な自由変異形をもちうる、としてきた。これは「語声調」を「語」の素性としてではなく「語形」(音韻語)の型とみる点で、早田輝洋(1977)とは異なり、上野(1984, 2012)のN型アクセントにより近い定義である。しかし、語声調類型とN型アクセント類型の大きな論点のひとつであるこの「位置」の問題については早田(1977)が隠岐(五箇村久見方言)の三型アクセントについて「どこにアクセント(核)があるかの指定はない」としているのに近い。ただし、早田(1983)では、原口庄輔(1977, 1978, 1979)と同様に、基底形で位置を指定しておき、さらにアクセント移動規則によって各語形の最終的な音声実現ごとのアクセントの位置を指定する分析をとっている。一方、服部(1973)のデータの川上薫(1975)による解釈は、文節形で位置が移動する「b(1)」の各語群(A系列に対応)をも「アクセント核」と認めないという厳しい立場であるが、川上(1983)においては早田(1977)の位置が有意味ではないという見方を支持して「ピッチ形の対立」とし、ただし、語声調にも位置が固定したアクセントがありうることは否定しない、という立場をとる。

これに対し、上野(1983)は、久見方言についてはアクセント核の位置が文節長ごとに固定していることを強調するが、中村方言の記述である上野(1989)は、この方言が核の位置の弁別ではなく「ピッチ形の対立」の体系をもつとし、さらに、連文節環境でのこれらのピッチ形の、「句」内部の卓立文節との関係に応じたさまざまな環境変異形について詳述する。この体系では、基本形の三型の対立が完全に実現するのは、「卓立文節」に限られており、卓立文節(および、卓立文節ではないC系列基本形)に後続する位置ではピッチ形の対立は中和し、先行する卓立文節の型によって決定される音形をとる。また、卓立文節に先行する位置で、B系列は常に下降のない平進形をとり、A系列も、自由変異形としてこれと同じ平進形をもつ。

上野(1989)から見て取れるのは、隠岐の他の方言についても同様なアクセント交替現象がないか、連文節データを集める必要があるということであるが、本稿では、既刊の音声資料である『全国方言資料』の2地点(旧黒木村宇賀、旧中村伊後)の談話資料において、

アクセント交替を観察して分析するにとどめる。程度の差はあるが、どちらの方言においても、単一の「アクセント核」の文節内での位置の弁別として記述できる体系ではないと考える。(第4節)また、文節末の「境界特徴」が弁別に関与している可能性を検討し、これを含めて隠岐アクセントの通時的変化を説明することを試みる。(第5節)

「連低式の高起化」を経たと考えられる N 型アクセント(語声調)としては、新田哲夫(2012)、松倉昂平(2014)など、福井県に型の統合の点で隠岐とよく似た三型アクセントが報告されており、今後の研究の進展により、日本語アクセント史の理解に大きく寄与することが期待される。これらのアクセントに関する記述も参照した上で、改めて隠岐のアクセントを通時面・共時面の両面で見直す試みである。

## 2 各系列のピッチ形の方言変異概観

先行研究で記述されている音節長に応じた音節ごとのピッチ変化を、語声調のメロディーとして、系列単位でまとめてみる。L,M,Hで「低、中、高」、"."で音節区切りを表わすが、音節数が増えると長くなるピッチについては、音節区切りを付さず、L+とH+でそれぞれ低あるいは高の音節連続を表わす。音節数が少ない場合には現れないピッチについては括弧で括ったが、L+とH+は現れない場合でも括弧を付さない。文節の音節数に応じて文節頭からの位置が決まっているとされる下降については、下降核とする説に応じてH]で表記した。文節末からの位置が決まっているとみられる下降については、核ではなく境界声調である可能性を考慮して"]"を付さない。出典のない方言は広戸・大原(1953)による。順序は、金田一(1972)・上野旧説の順に従い、「無核」のCからはじめる。

(4) C 系列 広戸・大原(1953)の「第3群」金田一(1972)の第1,4,7表、上野(1989)のA

L.H+	浦郷・海士・黒木・磯
L+.M	西郷・東郷・中条・布施
(L.)H+.LM	中村・伊後(上野 1989)
(H.)L+.H(.L)	知夫
H.L+.LM	五箇・都万

非下降のピッチ形となる方言、文節末に下降の出る方言(知夫方言では4音節以上)語頭に下降の出る方言に分けられる。五箇村久見方言も語頭に下降が出るが、五箇方言ではA系列でも同様な語頭の上昇が現れるため、このHを非弁別的とみなして無核とする分析が多い。後述するように、伊後方言の談話音声資料では、この語頭のHが異音的に出現する。文節末の下降は、旧黒木村の談話音声資料で境界特徴として確認されるが、他の方言

でもそうである可能性もある。金田一(1972)は文節末の H を一律に「タキのない印」で表記している。しかし、広戸・大原(1953:189)の形容詞の活用表では、C 系列の音形で出る方言が多いアツーナル「暑くなる」の「アツー」で文節末が高い方言では「ナル」がすべて低で表記(ア[ツー]ナル、アツ[-]ナル)されており、少なくともこの場合は境界での下降があるとみなければならない。中村方言の文節末の下降は、広戸・大原(1953:169)によれば、下降の後に「語尾が微かに昇る」音形で B 系列と区別される。上野(1989)によれば、卓立文節に先行する位置で B 系列の下降が消えるのに対し、C 系列の下降はこの位置でも保たれる点、さらにこの場合には後続の非卓立文節が型に関わらず L+.H の音形で実現する点で B 系列と区別される。広戸・大原(1953:189)でも、中村方言には[ア]ツーナ[ル]の音形が報告されている。

(5) B 系列 広戸・大原(1953)の「第 2 群」金田一(1972)の第 2,5,8 表、上野(1989)の B

H].L+	海士(金田一 1972)
(H.)H].L+	浦郷・海士・黒木・磯・西郷・東郷・中条・布施(1 音節語) <sup>2</sup>
(L.)H].L+	五箇
H+.L	布施(多音節語)・知夫
L.H+.L	中村・伊後(上野 1989)

二音節の文節では頭音節の後、三音節以上の文節では第二音節の後で下降すると報告される方言が多い。もっとも「アクセント核らしい」挙動の下降である。一方、語末音節で下降する布施・知夫・中村の三方言を広戸・大原(1953:167)は「崩壊的傾向」と呼んでいるが、知夫方言については第二音節の後で下降する音形も報告し、崩壊的傾向を新しい発音であると推定している。上野(1989)によれば、中村方言の B 系列の文節末の L は卓立文節のみで実現し、これに後続する非卓立文節は型に関わらず H.L+ の音形で実現するが、この場合の H は B 系列卓立文節末からの上昇は含意しない。

(6) A 系列 広戸・大原(1953)の「第 1 群」金田一(1972)の第 3,6,9 表、上野(1989)の C

L.H].L+	海士(金田一 1972)
L(.L).H].L+	西郷・東郷・中条
L(H).H].L+	浦郷・海士・黒木・磯
(H(.L)).L.H].L+	五箇・都万
H(.).L+.H(.).L	伊後(上野 1989)

<sup>2</sup> 広戸・大原(1953:160)の 1 音節第 1 群の布施村の形は 2 音節以上の語との「系列性」を満たしていない。

H(.)L+.H	中村
L+.H(L)	布施
(H.)L+.H(L)	知夫

2音節以上の文節にのみ可能な型である。2音節では、中村方言・伊後方言以外はL.Hであり、語末のHに下降調が報告されているものもある。3音節以上の文節では、重起伏がある(五箇式、知夫式)かない(浦郷式)か、語頭以外での下降の位置が3音節目の後までか、3~4音節目の後か、文節末音節か、あるいは下降がないか、また、下降に先立つHが1音節のみ卓立するのか、2音節にわたるか、といった変異がある。語頭以外での下降で、L+(0音節以上任意の音節数のLの連続)が後続しうるもののみをアクセント核とみなして"]"を付した。以下の一覧にみるように、4音節以上の文節で文節末のHを許容するのは中村方言のみである。金田一(1972)のA系列の文節末Hの表記では、中村方言と知夫方言を除き「タキのある印」を用いている。

(7) A 系列 3 音節

L.H.L	浦郷・海士・黒木・磯・西郷・東郷
L.L.H	布施・中条
H.L.H	五箇・都万・中村・知夫
H.L.HL	伊後(上野 1989)

(8) A 系列 4 音節

L.H.L.L	海士(金田一 1972)
L.H.H.L	浦郷・海士・黒木・磯
L.L.H.L	西郷・東郷・布施・中条
H.L.H.L	五箇・都万・知夫
H.L.L.HL	伊後(上野 1989)
H.L.L.H	中村

(9) A 系列 5 音節

L.H.H.L.L	浦郷・海士・黒木・磯
L.L.H.L.L	西郷・東郷・中条
L.L.L.H.L	布施
H.L.L.H.L	五箇・都万・知夫・伊後(上野 1989)
H.L.L.L.H	中村

(10) A 系列 6 音節

L.H.H.L.L.L	浦郷・海士・黒木・磯
L.L.H.L.L.L	西郷・東郷・中祭
H.L.L.H.L.L	五箇・都万
L.L.L.L.H.L	布施
H.L.L.L.H.L	知夫・伊後(上野 1989)
H.L.L.L.L.H	中村

以上からうかがえることは、A 系列と B 系列に関しては、「アクセント核の位置の違い」による弁別がありそうに見える方言が多いことである。しかし、(7)で L.H.L をとる体系では、B 系列の H.H.L との弁別が下降位置には還元できない。また、中村方言のほか、布施方言・知夫方言も、これらの系列の下降が文節末側に偏っており、ピッチ形と境界特徴によって型が弁別されている可能性があることがわかる。

通時的変化として、金田一(1972)は、C 系列無核、有核の B 系列と A 系列でそれぞれ第 1 音節と第 2 音節に核の位置が固定した海士の体系を祖形とし、H が後にずれる変化を仮定する。上野(1989, 2012)も、ほぼこれと同じ過程を中村方言に想定している。いずれも、「アクセント核の位置の移動」として通時的変化を説明する考え方である。しかし、語末側に固定した下降の成立に関しては、アクセント核だけでなく、語末の境界特徴も考慮する必要があると思われる。たとえば、知夫方言は、A 系列と C 系列が弁別を喪失した二型アクセントであるが、この前段階として、無核と考えられる C 系列が A 系列と似た音形になっているような体系を想定しなければならない。

### 3 隠岐アクセントに共通の改新

本節では、隠岐の諸方言のアクセントが分化をはじめ以前に共通に経たと考えられる変化を、広戸・大原(1953)の記述する中国アクセント・出雲アクセントとの比較によって再建する。まず、「三型アクセント」の成立に関わる重要な変化を考察する。

#### 3.1 付属語(助詞類<sup>3</sup>)のアクセントの喪失

上野(1984, 2012)は、N 型アクセントの一般特性として、助詞(および助詞連続)が自らのアクセントを持っていないことをあげている。また、これは、もうひとつの重要な特性

---

<sup>3</sup> 上野(2012)は「文節性」を定義してこれが成り立つ「固有のアクセントをもたない助詞・助動詞(助詞類)」を「付属語」ではなく「接合形式 bound form」としている。出雲アクセントでは「無核型」でこの「文節性」と「系列性」が成り立っているように見える。なお、筆者の「語声調」は「文節性」を定義に含まず、日本語方言に限れば「語声調」のうち「文節性」を獲得する改新を経たものが「N 型アクセント」であると考えられる。

である「系列化」(同じ長さの同じ型の文節は、付属語の有無や長さにかかわらず同じアクセントになる)の必要条件でもある。助詞にアクセントの区別があると、文節アクセントが一定の型に定まらないからである。しかし、隠岐の対岸にあたる出雲アクセントは、多型アクセントであるが、助詞が一部を除いて無核であり、中国アクセントや東京アクセントのように、京阪アクセントの低起の助詞に対応するとみられる2音節の助詞(マデ、ヨリ、ナラ)が有核になっていない。これが隠岐と出雲での共通の改新であったとすれば、隠岐では三型化に向かったのに対し、出雲では(おそらく低起式の高起化を経て)多型化したとみることになる。

出雲アクセントは、いわゆる外輪式アクセントであり、名義抄式の高起類がすべて無核になるという変化を経ている。しかし、隠岐のアクセントはこの改新は共有していない。

### 3.2 高起類の再編

隠岐の三型アクセントでは、名義抄式の高起に対応する類がB系列とA系列に二分される。名詞の類では、-1・2類と-2類がB系列、-1類と-1・2類がA系列に対応する。動詞では、2音節の動詞形で島前諸方言と島後諸方言で違いがある。島前諸方言では、2音節の動詞形が活用形に関わらずB系列となるのに対し、島後諸方言では名義抄式の体系で無核であったと考えられる連体形(終止形)と否定形(ニン、ニズ)がA系列、有核であった活用形がB系列となる。3音節以上の動詞文節は活用形の長さに関わらず(ニレバ、ウカズを含め)A系列であるので、この島後諸方言の2音節文節形を除けば、すべて無核となる出雲アクセントと同様、高起類の動詞の名義抄アクセントの活用形による有核と無核の区別の痕跡はない。ただし、島前では、2音節以下の文節がB系列、3音節以上の文節がA系列に分裂する。

出雲アクセントでは、名詞の-1・2類が共に無核に統合しており、「外輪式」に分類されるが、隠岐ではこの改新は起きていない。-1・2類の統合は、出雲方言でも中輪式アクセントである中国方言でも起きているが、これらの諸方言では-1・2類がいずれも無核となり、-1類と統合しているのに対し、隠岐では-2類と統合し、これらの類に1音節の助詞が接続した2音節文節形が-1類と異なる音形をとる、という改新を起こしている。

動詞には、もうひとつ大きな改新がみられる。上野(1982)では、九州西南部の二型アクセントでみられる複合語規則(複合語の後部要素が型の弁別を失い、複合語が前部要素の型をとる)が、類の統合が異なる隠岐では成り立たないだろうと示唆しているが、広戸・大原(1953:174ff)の挙げている4音節以上の動詞のC系列(第三種)とB系列(第二種)は、いずれも前分の動詞連用形がそれぞれC系列とB系列であるような複合動詞であり、複合

動詞に限れば、複合語規則が成り立っているように見える。複合動詞でない動詞は4音節以上ではすべてA系列であり、名義抄式の高起の動詞に対応する動詞は、B系列とA系列とに二分されていることになる。上野(1982)が指摘するように、出雲アクセントでは二型アクセントに似た複合語規則が成り立ち、複合動詞を含め、前分が無核である複合語はすべて無核となる。複合動詞の複合規則が、助詞のアクセント喪失と同様に、出雲と隠岐に共通の改新であるとすれば、ここでもまた、出雲の無核統合に対して、隠岐の二分という対応があることになる。

-1・2類の弁別の維持自体は改新ではなく保守的な特徴であるが、児玉(2015)では、-2類を、京都を中心に「境界特徴のアクセント核化」が起きたものとみなし、これが及ばなかった外輪式と九州では境界特徴による弁別が失われた結果として無核に統合した、とする仮説を提案した。とすれば、-2類と-1・2類を含むB系列は有核で、-1類を含むA系列は無核の型に由来する、とみるべきだろうか。後で見るように、A系列とB系列は、ともに「連低式の高起化」を経た、低起に由来する型と合流しており、京阪式でも東京式でもこの「連低式の高起化」が有核型を増やしている。A系列もまた「有核」であるとするれば、高起の語の場合、この核がどこから生じたのかの説明が必要になる。上野(2012)では、この点を、本土方言祖体系の「下降式」からの核の発生で説明している。

中国方言では高起に由来する型の2音節以上で有核と無核の対立があり1音節では無核のみであるが、隠岐の場合はこの統合のしかたが異なっており、1音節では「有核」(B系列)のみ、3音節以上で「無核」(A系列)のみとなる。両方言はそれぞれに別の改新を経たと考えなければならない。また、出雲と隠岐の関係は、高起の類の統合に関する限り、派生関係があるとすれば、隠岐から(すべて無核で弁別のない)出雲が派生したとみるべきであり、逆ではないのである。

### 3.3 連低式の高起化

すでに述べたように、名義抄式の低起の類は、隠岐のアクセントでは三型に分割されているが、この型の区別は、名義抄式の音形で、語頭のLが1音節(C系列)か、2音節(B系列)か、3音節以上(A系列)かにほぼ対応しているようにみえる。

名詞の類別では、-3類(L.L)と-5類(L.L.H)がB系列、-4類(L.L.L)がA系列という対応になる。これらの類は、京都では南北朝期以降に-3類(H.L)・-5類(H.L.L)、-4類(H.H.L)と高起化し、それぞれ-2類(H.L)・-3類(H.L.L)、-2類(H.H.L)と統合したことが知られている。東京式アクセントの諸方言でもこれとほぼ共通の過程を経てアクセントの位置対立を獲得した、というのが児玉(2015)の論点であるが、隠岐でもこれと同じ変

化を経ているとしたら、B系列が語頭、A系列が第2音節にアクセントをもつとする金田一(1972)や上野(1989, 2012)の祖形は、3音節以下の名義抄式の体系から直接導かれることになる。

(11) 名義抄式体系低起の動詞(L+H類)の活用形アクセントと隠岐の動詞形の対応

LH	R]	LH]	LH	デル	<u>デ</u> タ	<u>デ</u> レバ	デン	C <sup>4</sup> C C C
LH	LH]	=	LLH	カク	<u>カ</u> イタ/ <u>カ</u> ケバ		カカン	C C = B
LLH	LH]	LLH]	LLH	オキル	<u>オ</u> キタ	<u>オ</u> キレバ	オキン	B C B B
LLH	LLH]	=	LLLH	アルク	<u>アル</u> イタ/ <u>アル</u> ケバ		アルカン	B B = A
LLLH	LLH]	LLH]L	LLLH		(カサネルの例のみ)			(A *A *A A)
LLLH	LLH]L	=	LLLLH	ヨロコブ	<u>ヨ</u> ロコ <u>ン</u> ダ/ <u>ヨ</u> ロコ <u>ベ</u> バ		ヨロコバン	A *A = A

名義抄式の低起(L+H)の動詞に対応する動詞の活用形は、すでに述べたように3系列に分裂するが、この分裂の条件は、(11)にまとめた広戸・大原(1953)の語例にみるように、名義抄式の語頭のLの数にほぼ対応する。広戸・大原(1953)では、複合動詞以外では4音節以上の動詞は高起・低起の区別を失うとしており、一段動詞に関しては語例もないが、対応のずれ(\*で表記)は、この4音節以上の動詞に限られる。後述するように、『全国方言資料』の2地点の談話資料には、ヨロコンデ、カクレチヨルなど終止連体形が4音節の動詞の3音節動詞形がB系列でも出ており、例外をなさない方言がある可能性もある。

複合動詞のうち、前分の動詞形が3音節の低起の動詞であるものは、前分が1・2音節の高起の動詞であるものとともに、B系列の複合動詞となり、活用形もB系列となる。

出雲アクセントでは、名義抄式の低起に対応する動詞はすべて起伏式となり、終止形では次末音節に核をもつが、核の位置がオキ]~オキ]ル、カ]キ~カ]クのように固定する変化を遂げており、名義抄式の活用形による有核と無核の区別の痕跡はない。中国方言では、低起でも高起でも名義抄式の活用形による有核と無核の区別に起因するとみられる核の位置対立を保存しており、複合動詞以外の低起に対応する動詞の終止連体形では次末音節に核をもつ。これらの終止連体形の次末音節のアクセント核は、出雲方言・中国方言のような東京式アクセントや京阪アクセントで、L+HがHの直前まで高起化して、低起式の「上昇契機」の違いが下降アクセント核の位置対立に変化したことをよく示している。この結果として、京阪アクセントや中国方言など中輪式・内輪式アクセントでは、これらの型が高起有核式と合流したが、高起無核の型は平板型として維持された。これに対して、隠岐

<sup>4</sup> (11)ではスペースの都合で「系列」を省く。

では同じ「連低式の高起化」が、少なくとも最終的には、A系列とB系列の2種類の対立しか生まなかった。また、結果として、高起式の無核を含む型とも統合してしまった、ということになる。

### 3.4 低起を保った可能性のある類

名詞の類別では、C系列に対応するのは -3 類、 -4・5 類、 -6・7 類であり、京阪アクセントにおいて低起を保った類に対応する。京阪アクセントでは -4・5 類、 -6・7 類に有核と無核の対立を維持するが、東京式アクセントでは、 -3 類と -4・5 類が有核になり、 -4・5 類の区別がないものが多く、出雲・中国両体系も同様である。 -6・7 類の対応は例外が多いが、広戸・大原(1953)は出雲アクセントの型の統合を -5・6・7 類とみており、出雲方言での規則形は有核であるとみられる。

これらの類の核は、語頭隆起で説明されることが多い。語頭隆起を仮定すれば、語末側での有核と無核の対立があったとしても中和することになる。金田一(1972)が隠岐の祖形として「中国方言の祖形に雲伯方言の性格を少しまじえたようなもの」を仮定した理由のひとつは、おそらくC系列が京阪式の有核と無核の対立を失っていることによるとみられ、語頭核をもつ型をC系列の祖形に仮定している。このために、五箇式などC系列に語頭隆起のある方言は、語頭隆起 平板化 語頭隆起、というようなめまぐるしい変化を経ているという説明になっている。

本土アクセント祖形から隠岐アクセント祖形を導く上野(2012)は、有核型が核を失って無核になる変化によって簡単に説明している。しかし、筆者には「核の脱落」が無条件に起きうる変化であるとは思えない。

児玉(2015)では、九州の諸方言にみられる同様の対立喪失を語頭隆起にも核の脱落にもよらないで説明するために、これらの対立が本来は核の有無によるものではなく、語末の境界特徴の有無によるものであるとした。南九州の二型アクセントでは、境界特徴がある側に統合して助詞が自立性を失い、「文節末のタキ」が生じたと考えるのである。隠岐でも同様の「文節末のタキ」が祖形に想定できれば、名義抄式以前の LH+の語声調から語頭隆起を経ないでC系列が成立したと考えることができる。

先行研究では、C系列文節末に境界特徴の存在の可能性を示唆しそうなのは、上述のように広戸・大原(1953)の[アツー]ナルの音形と、上野(1989)の中村方言C系列の文節末の下降が卓立音節の前で消えない、という点だけであるが、後述するように『全国方言資料』のうち、少なくとも黒木村宇賀の談話音声資料ではC系列の文節の後で、音韻句の内部とみられる位置では一貫して境界下降が観察される。

### 3.5 「非アクセント核」仮説

隠岐諸方言が中国方言や出雲方言とは異なる改新を経ているということは、これらの方言が経たアクセント核獲得の変化を経していない可能性があるということである。隠岐では、「連低式の高起化」がLの長さに応じた核の位置対立を発生させず、A系列とB系列の2種類しか生まなかったとすれば、特にA系列の高起化が、第2音節にピークをもち、音節数に関わらずHの直前まで連続して下降する「下降式」だったと想定することにより、無理なく説明することができる。このような第2音節からのゆるやかな下降は、福井県の三型アクセントにおいても、新田(2012: 67)や松倉(2014: 145)で報告されている。後者は、二つの方言で、A系列とC系列に相当する型のそれぞれ一方で、共に他方の文節末付近で下降をもつ型に対応しており、周辺の二型アクセントにおいてA系列とC系列に相当する型が統合していることとも併せて、これらの型の対立が第2音節への「アクセント核」の有無よりはむしろ音節連続全体に加わる下降ピッチ形の対立として解釈すべきであることを物語っているようにも思われる。隠岐の「連低式の高起化」が生んだB系列とA系列の対立も、「早い下降」(HL+)と「遅い下降」(H>>Lで、以後、多音節にわたりうる下降を表記する)のメロディー対立とみることができる。

三型アクセントのもう一つの問題は、「連低式の高起化」した型が、高起類の無核の型と統合してしまっている点である。この点も、隠岐アクセントで「連低式の高起化」が起きた時点で、高起式がすでに高平調ではなく下降調に変化し、短い語形を中心としたB系列の「急な下降」と、2音節以上の語にだけみられるA系列の「緩やかな下降」、つまり下降式とに分裂していた、と考えれば説明しやすい。児玉(2015)では、名義抄式の下降を、「境界声調のアクセント核化」であると考えたが、下降式をもっていた隠岐の祖形では文節末が低く終わるこの式で、文節末下降による「境界声調」の有無の弁別は維持できなくなり、

-1・2類のみで弁別が保たれた、と考えるのである。 -2類の末音節のLは、名義抄式では先行音節の「アクセント核」として固定したが、隠岐では「核」とはならず、語声調の「早い下降」のメロディーとして機能したと考える。

児玉(2015)の「原平安アクセント」の語声調は、下降はすべて境界声調によるものであり、メロディーはすべて非下降(H+, L+{, L+H, LH+)であると仮定した。下降のメロディーは、いわば「あきま」であり、高く始まるH+が「下降式」に移行することは自然な変化であると考えられる。また、「遅下がり」の型であるA系列で、音節数の多い語で下降の開始位置が後ろにずれていくことは、文節の音節数が増えてもある程度の傾斜のある下降曲線を維持するためであると考えれば、これまた無理のない変化である。最終的には、

語末付近だけで下降する型が現れるのも、究極の「遅い下降」の実現であるといえる。語末近くまで非下降を維持すると、境界下降をもつ非下降のC系列と音形が似てくる。隠岐の知夫アクセントや、福井県の二型アクセントでC系列とA系列が合流しているのは、このようなA系列の下降の遅れの結果ではないだろうか。

この仮説に立てば、B系列の祖形のもつ頭音節Hからの下降と、A系列の祖形のもつ第2音節からの緩やかな下降は、本来性質の異なるものであり、単一の「アクセント核」として同列には扱えないものであっただろうと予想される。『全国方言資料』の2地点の談話音声資料からも確認できるA系列とB系列の「H」の音声的実現の違いは、おそらく「そもそもアクセント核が発生していない」ことにより説明できるのではないかと考える。

#### 4 『全国方言資料』隠岐の談話音声資料の分析

##### 4.1 島根県知夫郡（現隠岐郡）西ノ島町黒木字宇賀

旧黒木村の東端の地区で1959年6月20日に収録された談話音声資料である。話し手は男女各2名の4名。広戸・大原(1953)が「浦郷式」に分類する旧黒木村の型の弁別を再掲する。

- (12) 第3群(C系列)      L.H+  
       第2群(B系列)      2音節: H].L+      3音節以上: H.H].L+  
       第1群(A系列)      2音節: L.H      3音節: L.H].L      4音節以上: L.H.H].L+

4音節以上の文節ではH]の位置が明確に異なるため、このデータを参考にして型の弁別を聞き取ることも比較的やさしい。しかし、3音節以下の文節では特に、たとえば2音節のA系列・C系列がともにL.Hとなっている点の区別のようにHとLの二値ではうまく表記できない場合がある。逆に、東京方言の無核の平板型をL.H.H...とする場合のような「(弁別に関与しない)過剰な特定」の可能性も無視できない。また、句の境界のない連文節の第2要素以下では型の聞き分けがむずかしいものがある、という別の問題もある。そこで、(13)のようなピッチ形を作業仮説として用い、句の第1要素を中心として型を推定する。(12)との食い違いや、問題がありそうな場合を中心に述べていく。”<<”と”>>”は、それぞれ音節連続に加わる上昇と下降を表し、H+, L+同様音節境界を省く。

- (13) C系列      L << H}  
       B系列      LH.(H)L.L+  
       A系列      L.(L.)H >> L

##### 4.1.1 C系列

まず、(12)でC系列の第2音節以降をHとするのは、黒木村村内での方言差でないとするれば「過剰な特定」の可能性がある。3音節の文節で、第3音節のみが高く聞こえる実現も多い。<sup>5</sup>

(14) ク[ビ]] テノ[ゴ}マイ]]テ 「首に(A)手ぬぐいを(C)巻いて(B)」 p294 (2回)

(14)は、同じページで2回繰り返されているが、1回目のテノゴはテ<ノ<ゴの上昇であるが、2回目はテノ<ゴに近い音形になり、末音節で急に上昇する。これに対してA系列の2音節語でも、比較的平坦な第1音節から第2音節に向けて急激な上昇があるが、その後で下降が続く点でC系列と弁別される。たとえば、(14)のクビは、2回の発話の1回目がクビーと長音化し、2回目が短いクビであるが、いずれの場合も第2音節は下降調で出ている。

C系列の長い語では、全体に平坦に聞こえる場合と、文節頭での上昇幅が大きい場合の両方がある。

(15) a. シンバシラオ]] [マイ]]テー 「新柱を(C)巻いて(B)」 p290

b. ヨ[コ[ヤサンガ [[オガン]]デ 「代宮屋が(C)拝んで(B)」 p290

(15)の2例ではC系列の語の後に句の境界があると考えられるが、(15)aのシンバシラオの文節末の下降は、長い文節で境界下降が現れている例である可能性がある。(14)のテノゴの後のように句の境界がない場合は、(16)のように一貫して文節末に境界下降が現れる。

(16) a. ヒー}ツケツ]]ガ 「火を(C)つけるのが(B)」 p290

b. ジューニジュ}スギタラ 「十二時を(C)過ぎたら(C)」 p291

c. ハ[オ}ソメヨツ]タダ 「歯を(C)染めたものだ(から)(A)」 p292

d. デ[ター}フッコンダ]] 「出たり(C)引っ込んだり(B?)」 p293

e. セキユオ}マゼタリ}シテ 「石油を(C)混ぜたり(C)して」 p294

f. ココ[ニ}オツ]]ゾ]] 「ここに(C)いる(B)ぞ」 p295

g. [[トードリー}ナッタ 「棟梁に(C)なった(C)(わけだ)」 p297

h. ユーハン}タバダ [テ]ヤ 「夕飯を(C)食べる(C)と」 p298

i. ケンチャクアミ}チュモノ]ガ 「巾着網(C)という(B?)ものが(B)」 p302

j. ヨツ[バリ}チューー [モノ]ニ 「四つ張り(C)という(B?)ものに(B)」 p302

<sup>5</sup> 『全国方言資料』の引用例で用いる記号は、”]”：下降、“[”：上昇“[[”：先行音節内部の下降、“[[”：後続音節内部の上昇。いずれも聴覚印象の表記であり、音韻解釈を示すものではない。ただし、“}”：境界下降は音韻表記としても用いる。句の内部の文節境界での下降である。共通語訳は原則として『全国方言資料』に従い、第8巻辺地・離島編IIの収録ページを付した。

- k. コ[コノ}モ]ナ 「お宅の(C)者は(B)」 p305  
 l. ナエ[ガ}タラン]]ワ 「いも苗が(C)足りません(A?)よ」 p306  
 m. ナダヤ[ノ}バーサンダ}ネーカ 「名田屋の(C)ばあさんでは(C)ない(C)か」 p308  
 n. [サンジューエンノ}ツリダ [ネ]] 「30 円の(C)おつりです(A?)ね」 p312  
 o. ホシ[テ}オ]ケ [ヨ 「ほして(C)おけ(B)よ」 p314  
 p. ホシ[テ}ヤ]ル ワ 「ほして(C)やる(B)よ」 p315  
 q. ドガ[ナ}ピョーキデ 「どんな(C)病気で(C)」 p316

(16)a, d, g, h のように、文節末に長音節が出る場合でも、原則として文節末まで非下降であり、末音節で下降の出る A 系列との弁別は保たれていると考える。

- (17) a. シェッ[ケン]]アル 「せっけんは(A)ある(C)」  
 b. [[ベン[トー]]イレー]] ナ 「弁当を(A)入れて(A)くれ」 p313  
 cf. ベン[ト]ア 「弁当は(A)」  
 c. ヨメ[サン]]モラワシ]タソー]ニ 「嫁さんを(A)もらわれた(A)そうで」 p318

A 系列の短い末母音の下降は、(14)で述べたように音韻句の区切りの前でも、また(18)b のように区切りがない場合でも比較的はっきり出ている。

- (18) a. m. サ[バ]] [ワ]リ キ[テー 「さばを(A)割りに(B)来て(C)」 p298  
 b. f. サ[バ]]ワ]リ キ[テー]] 「さばを(A)割りに(B)来て(C)」 p298

これに対して、C 系列でも音韻句末で下降が出る場合がある。(18)b のキ[テー]]は句末イントネーションによるものであるが、(19)では句頭の LH との間「音調の谷」のような微妙な下降である。また、音韻句内部では、(20)のように、後続の文節が母音ではじまる場合には前部の末音節で境界下降が開始するので、A 系列と C 系列の対立が中和する場合もあると考えられる。

- (19) a. ム[リ]] [シェン]]ヨーニ 「無理を(C)しない(B)ように」 p307  
 cf. ム[リ}シェン]]ヨーニ 「無理を(C)しない(B)ように」 p310  
 b. ジサン]] マ[メ]ナ カ 「じいさんは(C)元気(A)かね」 p309  
 (20) a. ココ]ニオッ]ケン 「ここに(C)いる(B)から」 p295  
 b. ヨツ[バン]ニイッ]チョ(ル)モ]ナ 「四つ張りに(C)行っている(B)ものは(B)」 p300  
 c. ド[コイ]]イキ]タダラ カ 「どこに(C)行ったもの(A)でしょう(C)か」 p301  
 d. ウミー]]イキテ 「海に(C)行って(A)」 p312  
 cf. ヨロ[シュー]ニイッ]テ 「よろしく(A)言って(B)」 p310

A 系列から C 系列に合流した可能性がある語としては、(21)の 1 音節語ヨー「魚」があ

る。広戸・大原(1953)では「ウオ」が A 系列である。長い文節形で確かめる必要がある。

(21) [ヨー]モライ]] 「魚を(C?)もらいに(A)」 p302

#### 4.1.2 B 系列

B 系列は、3 音節の文節で下降の位置が A 系列と同じ第 2 音節となるが、この弁別は比較的やさしい。A 系列の第 1 音節がつねに L で低平に近いのに対し、B 系列では、(13)に示したように、H への上昇が頭音節からはじまっており、3 音節以上の語では、聴覚的には広戸・大原(1953)の表記のように、頭の 2 音節が高く聞こえることが多い。むしろ、2 音節目での下降の開始が早ければ、頭高に聞こえる発音もある。下降開始位置が必ずしも重要ではなさそうなことは、(22)の同じ語の発音が(22)b の強調的な発音でどう変化しているかからも見て取ることができる。

(22) a. [[ピン]ノ クチ[カ]ラ 「びんの(B)口から(A)」 p300

b. [[ビーン]ノ クチ[カ]ラ 「びんの(B)口から(A)」 p300

(22)a では、文節頭の上昇は短く、母音の間で H を維持してンでは下降に入っているため頭高に聞こえるが、(22)b の感嘆表現では、延伸された頭音節母音の全体にわたって長い急な上昇が加わり、頭音節全体が高く聞こえる。

無声子音にはじまる(23)では、文節頭のパッチ上昇は現れず、最初から高い。下降開始位置の開始は、音節構造よりは頭音節の長さが関わっている可能性がある。(23)a は全体が 0.4 秒程度の早い発話、(23)b は 0.7 秒程度で、頭音節の母音部に限れば 3 倍近い開きがある。

(23) a. [タノ]ミマス 「頼みます(B)」 p318

b. [タ]ノンマス 「頼みます(B)」 p318

文節の音節数が少ないほど音節長は長くなるので、2 音節語で頭高が出やすい。第 2 音節が長音節の 2 音節語でも、3 音節語より頭高が出やすいが、(25)のように第 2 音節側にピークが出る発話もある。

(24) a. [[ア]ナンナカ[ニ 「穴の(B)中に(C)」 p293

b. [[ワ]カイ [[モ]ノワ 「若い(B)者は(B)」 p295

c. [[ワ]ルイ [コ]ト 「悪い(B)こと(B)」 p295

(25) a. [[ワカイ]] (D)トキニ]]ワ 「若い(B)ときには(B?)」 p290

b. [タカイ]] [[トコー]] 「高い(B)ところを(B)」 p294

c. [[アツイ]]ダケン 「暑いから(B)」 p310

頭音節が長い場合は、この音節で上昇が完結し、第 2 音節は必ず低い。

- (26) a. [[オー]ケナ [[ダイ]]コオ 「大きな(B)大根を(B)」 p291  
 b. [[トン]ダイ [[ナン]カ 「とんだり(B)などと(B?)」 p294

頭音節の母音が落ちて短い場合は、第2音節のみが高く聞こえる。

- (27) a. ン[コ]ヤシキンジーサンラチー 「向屋敷の(B)じいさんたちの(C)」 p295  
 b. ム[コー]]カラ モ[ラッ]テ 「向うから(B)もらって(A)」 p300

上記のような H の分布は、児玉(2012)で記述した屋久島の二型語声調の A 型冒頭の LHL とよく似ている。屋久島と平行的であれば、長い頭音節が無声化した B 系列の語では第二音節が高いことになるが、この方言ではこの音形では A 系列との対立が中和することになる。談話音声資料では、(28)のツッコンデ 1 語のみがこのパターンに該当する。

- (28) a. サ[バ]オ ツッ[コン]]デ 「さばを(A)突っ込んで(B?)」 p299  
 b. ツッ[コン]]デ ヤッ[ダ]ガ ノ 「突っ込んで(B)やるのだ(A)がねえ」 p299

広戸・大原(1953)によれば、動詞「突っ込む」は黒木村と同じ浦郷で A 系列、五箇では B 系列で記述されている。複合動詞規則からは B 系列が予測される語である。

B 系列の上昇後、第2音節以下ではただちにピッチが下降する。このピッチ下降は「アクセント核」に似た急な下降であり、その後にさらに L が続く長い文節では、徐々に緩やかになり文節末では平進に聞こえる場合も多い。

- (29) a. [[ア]マン]]ジャクナダ[ケン 「あまのじゃくな(B)ものだから(C?)」 p295  
 b. [[ナナ]ジューエンナッダ[ケン 「七十円に(B)なるから(C)」 p312  
 c. [[ニジュー]]エン 「二十円(B)」 p311

(29)a と b では、語境界とみられるダ[ケン]のダにわずかなピッチ低下があり、ここからピッチが上昇に転じていると判断できるが、それに先立つ下降の傾斜はゆるく、ほとんど平進接続に聞こえる。(29)b では、文節後部の音節は短くなり、二つの長音節は共に頭音節より短い。(29)c のように、後続の文節がない発話では最後まで下降が続くが、やはり末音節では下降が緩やかである。

このような後続文節への下降の緩みは、次文節文頭での速やかな非下降(あるいは上昇)への転換という形で、B 系列先頭音節の下降部分が短い語でも観察できる。聴覚的な印象では、文節境界で平進か、あるいはむしろ上昇があるようにも聞こえる場合もある。

- (30) a. [[ガイ]ナ[コ]ト 「たいへん(B)」『なこと(B)』 p297  
 b. [コ]マイフネ[デー 「小さい(B)舟で(C)」 p298  
 c. [サ]カノ[パー]サント 「坂の(B)ばあさんと(C)」 p302  
 d. [[サー]カン]バーサンガ 「坂の(B)ばあさんが(C)」 p303

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| e. [[エ]モ[タ]ベーテ    | 「いもを(B)食べると(B)」 p307   |
| f. [シバ]ラクダッ[タ     | 「しばらくぶり(B)でした(C)」 p308 |
| g. [[ヤ]スンデイヌ]リヤ   | 「休んで(B)帰れば(A)」 p310    |
| h. [テン]キ[デゴザン]]シテ | 「天気で(B)ございまして(A)」 p318 |

(16)の例にみるように、C系列に続く連文節では、後続の文節のHがほとんど現れていないように聞こえるものが多い。これに対して、(30)のB系列に続く連文節では、後続文節のHの上昇幅は小さいものの、位置が聞き取れて型の判別に悩まないものが多い。これらの連文節には、二句構造をとる実現形と一句にまとまる実現形がありうるので、可能性としてはすべて二句構造であるとも考えられるが、(30)の例は、対応する東京方言で文脈上二句構造が予想しにくいもののみを選んでいる。

このような連文節境界でのふるまいをB系列の語声調の特徴であるとした場合、C系列の下降境界特徴が次文節の冒頭での下降として実現し、その結果後続文節のピッチ形に影響を及ぼすのに対し、B系列ではそのような影響を及ぼさない終端部をもつ、と考えることになるだろう。

#### 4.1.3 A 系列

(12)の広戸・大原(1953)の黒木村の記述と、(13)の談話音声資料の分析で、A型についてもっとも大きく異なる点は、Hの下降が開始が3音節目の後になる場合に、2音節目を(12)がHとしているのに対し、(13)ではLとみている点である。(8)~(10)にみるように、(13)のようなHの1音節卓立は広戸・大原(1953)でも島前の諸方言で報告されている実現形であり、旧黒木村内の集落による方言差である可能性もある。もう一点の違いは、HとLの二分法を超えたピッチのメロディーの違いに着目するかどうかである。

すでに述べたように、2音節で問題になるC系列との弁別は、A系列では第2音節が下降調になるのに対し、C系列の場合、少なくとも連文節環境では文節境界まで高平調が維持される、という点である。3音節で問題になるB系列との弁別は、B系列では頭音節の冒頭に上昇曲線が現れる(あるいは、頭子音が無声の場合Hで現れる)のに対し、C系列では頭音節が低平に近い実現形となり、第2音節に向けて音節境界付近で急激な上昇がある、という点が第一である。さらに、第2音節のHがB系列では下降調になるのに対し、A系列では高平調かあるいは音節末までの上昇となる点を付け加えることができる。

頭音節に冒頭の低平部がある点は、2音節以上、第2音節または第3音節に現れるH音節が音節末まで高いか少なくとも急な下降をもたない点は、3音節以上でそれぞれ共通の、A系列の文節の弁別特徴であるといっていいたいと思われる。この点は、これらの位置の音節

が長音節である場合によりはっきりと観察できる。

- (31) a. ソン[ナ]ラ 「それなら(A)」 p290  
b. [ジュー] ヨッ[カ]デ 「十(B)四日(A)で」 p290  
c. アン[バ]エ 「網場へ(A)」 p297  
d. カン[ジェ]タヨリ 「数えたより(A)」 p299  
e. サン[ニン] 「3人(A)」 p302  
f. ヨ[イノ]ウチノ 「宵の(A)うちの(B)」 p297

(31)fが例外に見えるが、ヨイの上昇は中ほどで急になり、前後で平らに近くなる曲線であり、この場合はヨイが2音節として発音されているとみる。

- (32) a. アミ[ダイ]クダ 「網大工と(A)」 p297  
b. サン[ニン]クライ 「3人ぐらい(A)」 p298  
c. ス[スン]ダ 「進んだ(A)」 p301  
d. ネブ[タイ]テ 「ねむくて(A)」 p303  
e. ツ[ガー]モ 「植えようにも(A)」 p306  
f. タク[サン]ニ 「たくさん(A)」 p307  
g. イチ[バン]グサ 「1番草を(A)」 p309  
h. ニ[バン]グサ 「2番草を(A)」 p310  
i. スク[ナエ]ダエド 「少ないですが(A)」 p317  
j. オソ[ナエ]デ 「お供えで(A)」 p317

(32)の第2音節に長音節がある場合では、4モーラ目にあたる長音節後半に向けて下降が聞き取れる場合もあるが、その場合でもB系列のような急な下降にはならず、次音節の下降に緩やかにつながっている音形となる。

(32)でHが3音節目にあり最初の2音節が低平になっている例は、すべて第2音節の母音が狭い場合であり、これは広戸・大原(1953:164)で、浦郷町・海士村のA系列の「変型」として記述されている場合とよく似て見える。ただし、この環境での例外もある。

- (33) a. ア[ブ]ナイケニ 「あぶないから(A)」 p307  
cf. ツグ[ケ]ニ 「植えますから(A)」 p306  
b. ト[ツ]ジェン 「突然(A)」 p316  
cf. トチ[ジェン]ニ 「突然(A)」 p316

(33)の「アブナイ」は、広戸・大原(1953:190)でA系列の形容詞の代表語例として挙げられてあるものであり、黒木村ではL.H.H.Lの音形とされている。頭音節は低平になるもの

の、次の2音節はB系列冒頭の2音節とよく似たピッチ推移で、ブで上昇してピークに達した後、ナイが急速に下降している。文節末のケニは非下降であり、B系列の長いL+と似た音形となっている。(33)bでは、頭音節の低平調から無声子音部でピッチ曲線が中断された後、第2音節が高平調で、長音節の母音部冒頭からピッチが下降している。

頭音節が長母音でない場合は、4音節以上の文節では通常Hは第3音節となるが、頭音節の低平のあと、第2音節がどの程度上昇するかは大きく変異する。第2音節の母音が狭くない場合でも最初の2音節が低平に聞こえる語例もあれば、第2音節と第3音節がほぼ同じに聞こえる場合、第1音節と第3音節の中間の段階に聞こえるものもある。

- (34) a. シオ[カ]ス 「残り塩と(A)」 p300  
 b. サ[カ[ナ]ガ 「魚が(A)」 p297  
 c. ム[カシ]ジダイ]]ノ 「昔の時代の(A)」 p302  
 d. ム[カー]シ]ノ 「昔の(A)」 p301  
 f. ノマツ[シャ]エ 「お飲みください(A)」 p317  
 cf. モ[ラッ]テ 「もらって(A)」 p300 他

ピッチ形では、ほとんどの場合に第2音節に上昇が観察されるので、第2音節がHであるかLであるかはこの上昇のタイミングによる聴覚的な印象の違いであるといつてもよいかもしれない。ただし、(34)dのように、第2音節が長音節でかつ音節末が有声であれば第2音節の始まりからHに聞こえるような上昇が起きる。第2音節が促音を含む長音節では、単音節と同様の振る舞いとなっている。

A系列の下降開始の位置については、この談話音声資料でもおおよそ、3モーラまでの語では第2モーラ、4モーラまでの語では第3モーラのそれぞれ後で下降、という原則が成り立っている。しかし、談話音声資料では、この原則に合わない例もある。(34)fのような音韻的な条件が関わる例もあるが、そうでない場合もある。

- (35) a. コ[タエヨッ]タケン]] [ノー]] 「まいったものだから(A)ねえ」 p294  
 b. モライ[ヨッ]タケン]] 「もらったものだから(A)」 p298  
 cf. オワイ]チョンネ 「追いまわすのに(A)」 p294  
 c. ヒサシ[カッ]タ [ノー]] 「久しぶりだ(A)ね」 p308  
 cf. タ[ノク]サモ 「田の草も(A)」 p309  
 d. ヨロコ[バツ]シャラー]] 「お喜びでしょう(A)」 p318  
 e. ニョバ[ラチ]ノ 「女房たちの(A)」 p292  
 f. ニョーバ[ラ]チ]ガ 「女たちが(A)」 p298

(35)a-c は第 2 音節が長音節であるか、あるいは第 3 音節が無声音節である場合の H の後退というように見えるが、これらは(34)fと同様、ある程度長い文節でのみ起きる移動であるとみられる。(35)d は動詞文節の例であるが、音韻的には説明できない。(35)e-f は、同じ語の第 1 音節の長短が異なるが、いずれの場合も下降は 4 モーラ目である。もっとも H が後退している例が(36)a で、5 モーラ目での下降であるが、この複合語(C+B)は同じ話者の発話で C 系列としての出現例もある。

- (36) a. ヨツ[バリ[ア]ミオ 「四つ張り網を(A?)」 p297  
 b. ヨツバリアミオ 「四つ張り網を(C)」 p297

このほかに、H が第 2 音節に出るのか第 3 音節に出るのかの揺れが観察される。

- (37) a. マ[メ]ナツタカ 「元気でしたか(A)」 p309  
 b. [ジサン] マ[メ]ナカ 「じいさんは(C)元気か(A)」 p309  
 c. マメ[ナー] 「元気です(A)」 p309  
 d. [ミ]ナ マメ[ナ]カ 「みな(B)元気ですか(A)」 p309  
 e. [アー]ラチモ マ[メ]デ 「あれたちも(B)元気で(A)」 p309

(37)の発話は 2 名の話者の対話であるが、a,b,e と c,d がそれぞれ同一の話者の発話であるので、話者により H を第 2 音節におくか第 3 音節におくかが分かれていることになる。

(33)の第 2 音節の H の例も、同じ話者のものである。

一方、(34)f の条件での上昇の遅延が、比較的短い語で起きている発話例もある。

- (38) a. ウタツ[ター]]ワ 「歌いましたよ(A)」 p303  
 b. イキ[タ]ラ 「行ったら(A)」 p304

(38)b のタラ形は、タリ形と同様、タ形・テ形と同じ位置で下降がある例が多い。

A 系列の文節末の下降は、2 音節文節で音節末、3 音節文節で末音節全体の下降調となるが、それ以上の長さの文節で H に後続する部分が 2 音節以上にわたる場合も全体として下降が続く場合がほとんどであり、(33)a のように下降が途中で止まっている発話は例外的で、句末にのみ観察される。この点でも B 系列との違いがある。連文節環境では文節末の下降が短い場合は、次文節冒頭まで下降が継続していることが観察できる発話例も多い。

- (39) a. サ[ケー]]ノ]]ミヨッタガ 「酒を(A)飲んだものですが(C)」 p303  
 b. サ[カ]ナ]]モ]]ライー 「魚を(A)もらいに(A)」 p298

後続文節の文節頭のピッチに影響を与えるという点では、A 系列は C 系列と似ている。

#### 4.1.4 低起の動詞語形の活用型

談話音声資料の中には、(11)であげた広戸・大原(1953)の名義抄式の低起の動詞に対応す

るデータを補完できるものがある。終止形が4音節以上の単純動詞について、低起と高起の区別がないというのは、概ね確かめられる。(11)に語例のない低起に由来する一段動詞も、動詞形が3音節の場合でも、高起に由来する語例カサネルと同じA系列の実現例が談話音声資料には出ている。

- (40) a. カン[ジェ]タヨリ 「数えたより(A)」 p299  
 b. フラ[ケ]タ [ダ]ラワ 「開けたらろう(A)」 p301  
 c. フラ[ケ]テク[リヤ 「開けて(A)来れば(C)」 p302  
 d. ツカ[レ]テゴザラー]ケン 「疲れて(A)いらっしゃるでしょうから(A)」 p271
- (41) a. [モ]ドッタ [ゾー 「帰った(B)ぞ」 p314  
 b. モド[ラシ]タカ 「帰りなされたか(A)」 p314

名義抄式の未然形接続の助動詞は、アクセント型をもたず、動詞との接続形としてアクセントを担ったことが知られる。このことから、3音節の低起動詞モデルに対して、モデルは低起の4音節動詞であったと考える。談話音声資料では、モデルの連用形は一貫してB系列で出るが、(40)bは4音節動詞の規則形であるA系列の音形である。

これに対して、動詞ヨロコブは、連体形ではA系列で出るのに対し、連用形ではB系列が出ている。名義抄式との対応から予想される形ではあるが、これが残存形であるかどうかの確認には他の方言や他の低起五段動詞との比較が必要であろう。

- (42) a. ヨロ[コ]ブ コト]]ダ 「ありがたい(A)ことです(B)」 p306  
 b. [[ヨロ]コンジョーワ 「喜んでますよ(B)」 p305  
 c. [[ヨロ]コンデ 「喜んで(B)」 p308

3.2節で、隠岐の方言では複合動詞に「複合語規則」が成り立ち、4音節以上の動詞でB系列・C系列となる動詞は、それぞれ前分の動詞形がB系列・C系列のものになっているものに限られると述べた。アスペクト形式である～ヨル・～チョルも、この複合動詞規則に従っているものとみられる。しかし、談話音声資料の中には、複合動詞とはみられないC系列の長い動詞が1例出現する。

- (43) ツカマエラレリヤ 「つかまえられれば(C)」 p295

動詞ツカマエルは、広戸・大原(1953)の語例では、浦郷でツカムと同じC系列と記述され、A系列となる五箇との対応がくずれている。

語頭音節の無声化にともなう対応の乱れとしては、高起の動詞であるが(28)のツッコンデがA系列とB系列の両様の解釈を許すとした。広戸・大原(1953)では、五箇で複合動詞の規則的な対応形となるB系列のツキアタル・ツキオトス・ツキススム・ツキダス・ツッ

コムに対し、浦郷ではツキススムのみが B 系列となり、他はすべて A 系列となっている。

#### 4.2 島根県周吉郡中村（現隠岐郡隠岐の島町）伊後方言

島後北端の地区で 1959 年 6 月 20 日に収録された談話音声資料である。話し手は男女各 2 名の 4 名。五箇式に分類される方言であるが、中村方言の記述である上野(1989:18)の注の記述によれば、この伊後方言は、五箇（久見）と中村の中間的な特徴をもつ。この記述をまとめると以下ようになる。

- (44) A(C 系列) 1 音節 HLH 2 音節以上 H+.LH (文末形) H+.L (非文末形)  
B(B 系列) 1 音節 HL 2 音節 H.L 3 音節以上 L.H+.L  
C(A 系列) 2 音節 HL.H 3-4 音節 H.L+.HL 5 音節以上 H.L+.H.L

(44)は、中村方言との共通点を明示するために加えられたと考えられる分析であるが、『全国方言資料』で実際に確認できる音形も多い。ところが、この談話音声資料では、これとは異なる、隣接する久見方言と似た音形もしばしば出現する。同じ注の久見方言の分析を再掲する。

- (45) A(C 系列) 1 音節 HLH 2 音節以上 H.L+.LH (文末形) H.L+ (非文末形)  
B(B 系列) 1 音節 HL 2 音節 H.L 3 音節以上 L.H.L+  
C(A 系列) 2 音節 L.H 3 音節 H.L.H 4 音節 H.L.H.L 5 音節以上 H.L.L.H.L+

この 2 方言の違いは、次のようにまとめられる。

. B 系列と C 系列は、(45)ではそれぞれ文節頭側に H があり文節末側が低なのに対し、(44)では文節頭側は高平が続き文節末に 1 音節の L がある。

. A 系列は次の点で異なる。

- i. (45)では 3 音節以上の文節に出る語頭 H が、(44)では 2 音節文節にも出る。
- ii. (45)では 3 音節以下の文節に出る語末音節 H が、(44)では 4 音節文節にも出る。
- iii. (45)では、H が第 4 音節より後ろに出ないが、(44)では 3 音節以上の文節で文節長に関わらず文節末に LHL のピッチ曲線が出現する。

『全国方言資料』の談話音声資料では、これらの 4 つの特徴について両方のピッチ形が観察される。たとえば、-i であれば、ソリヤのような A 系列 2 音節語で、L.H と H.H・H.L の間の揺れが観察される、というように、同じ語形がピッチ形の異なる形で現れることが、この談話音声資料の大きな特徴である。このため、黒木村宇賀の談話音声資料と比べて、個々の語のアクセント型を判別するのも難しい場合がある。たとえば、H.L.L.H のようなピッチの動きだけでは、(44)の A 系列とみるべきか、(45)の C 系列とみるべきかの判断に悩むことになる。しかし、むしろこの揺れのおかげで型の判断が容易になる場合も

ある。たとえば、(44)のB系列とC系列(非文末形)はきわめてよく似た音形になるが、B系列とC系列では(45)との間の揺れのパターンが異なっている。

実は、この揺れの解釈をめぐるには、もう少し大きな問題が関わっている。この談話音声資料自体に問題があり、伊後の音形と久見の音形の両方を併用している話者が収録されている、という解釈ももちろんありうる。しかし、上野(1989)が指摘しているように、伊後方言が久見と中村の中間的な性質をもっている体系であるとすれば、この中間段階として二つの形が(異音的な交代形として)両用されていた可能性もあるはずである。現地調査を経ていない本稿では、後者の可能性を考慮して分析を行なう。ひとつの根拠は、談話音声資料で観察される揺れの中には、(44)でも(45)でも説明のつかないものがあることである。(44)と(45)は、どちらもA系列で重起伏のある体系である。しかし、伊後の談話音声資料では、C系列の語頭Hが出る(45)タイプと出ない(44)タイプの揺れがあるのと並行的に、A系列の頻出語彙でも重起伏のある実現形とない実現形の間で揺れているものが多い。広戸・大原(1953)の記述にも、五箇村周辺の調査地点について、「五箇的な特徴」つまり、重起伏が現れやすいという表現が頻出している。

金田一(1972)が(7)~(10)のようなA系列の変異を、最終的に中村方言に至る改新として説明したことはすでに述べたが、上野(2012)は、B系列とC系列についても中村方言を終点とする改新の連続として隠岐(知夫を除く)のアクセント変化を説明している。しかし、伊後方言の語頭隆起が「異音的」な交代形であるとすれば、C系列については中村方言のピッチ形のほうが語頭隆起の固定した五箇方言のそれよりもより古い段階である可能性もあるのではないかと考える。

以下では、伊後方言の談話音声資料にみられる「異音的」である可能性のある音形交替を中心に記述する。

#### 4.2.1 C系列の揺れ

C系列では、(44)タイプの語末の低いピッチ形(H+L~L.H+L)と(45)タイプの語頭の高いピッチ形(H.L+)の揺れとなる。最初に、同一話者の近接した発話の中で揺れが観察される例をあげる。この例が示すように、二つの語形は特定の話者に結び付けられるものではないし、また、特にスタイルの転換があるようにも見えない。

(46) a. テギネ]テ イッテ 「手ぎねと(C)いって(A)」 p266

b. アノ [テ]ギネ 「あの(A?)手ぎね(C)」 p266

(47) a. コバマ]ノ イ]マン[タイ]ショーノ 「小浜の(C)いまの(C)おやじの(C)」 p270

b. [コ]バ[[マー 「小浜は(C)」 p271

(48)は、二人の話者の連続した発話、(49)は別の話者の別の発話である。

- (48) a. [セン]ベデモ [[ヨーゴザンショー]] 「おせんべいでも(C)いいでしょうね(A)」 p279  
b. センベ]ニ スルッ[カ] ノ 「せんべいに(C)しょうか(A)ね」 p280
- (49) a. [バン]ゲ[[ワ [イン]][[デ 「晩方は(C)帰って(A)」 p262  
b. バンゲ]ワ ワスト 「夕方は(C)ひよっとすると(?)」 p281

次の揺れは、同じ話者の揺れであるが、少し種類が違う。

- (50) a. [タ]ベモノワ ツ[ライ]タ]ベモノデシ]タワ  
「食べ物は(C?)悪い(A?)食べ物でした(C?)よ」 p259  
b. タベモ[ノ]ワー 「食べものは(A?)」 p263

広戸・大原(1953)の語例でタベモノは、五箇で A 系列(重起伏)、浦郷で C 系列(無核)として記述されている。(50)b は確かに文節頭の H のない A 系列の音形にもみえるが、(50)a のような文節末側の H のない音形は少なくとも連文節構造の第 1 文節にはないとみられる。もしこの語形が C 系列であるとすれば、型を越えた揺れであり「異音的」な揺れではない。

連文節の第 2 文節でも、ソノ]ジブン]ニヤ(p258)、コド[モノ]ジブン]]ニヤ(p260)、ソノジ]ブンノ(p269)、アノ[ジ]ブン[ニヤ(p272)のような揺れがあるが、ピッチ幅が小さく聞き取り上の問題もあるため、ここでは問題としない。

頻出語例で、どちらの語形が出るかに著しい偏りがあるものもある。たとえば、イマ/ンマ「今」を含む文節は 14 例あるが、このうち(44)タイプになるのは 1 例のみである。これに対して、マエ「前」を含む文節の 5 例はすべて(44)タイプである。

- (51) a. イマー]](ホラ)アノ 「今(C)ほらあの」 p262  
b. [ン]マワ [ラ]クシター 「いまは(C)楽を(B)して」 p264  
c. マエ]ワ]ソレ [オー]]ゴトジャッタワ  
「前は(C)ほら たいへんなことでしたよ(C?)」 p271

C 系列の動詞も両形が出るが、～マスの形では(44)の型のみである。

- (52) a. ツ[キ]ダエータチュ]リヤ 「搦きだした(C)そうだ,そうしたら」 p270  
b. フキカケラ]レッ[トモツ]テ 「吹きかけられる(C)と思って(B)」 p271  
c. カリマシ]テゴザンシ]テ 「お借り(C)しまして(A)」 p275

(52)a は、文節頭音節が無声であるため H が第 2 音節に移っており、ツ[カ]ニャー]]「搦かなければ」のような本来 B 系列のピッチ形と下降の位置が同じになっている。

しかし、C 系列の頭高形と B 系列は、下降位置以外にもピッチ形の違いがある。前節の旧黒木村宇賀方言の談話音声資料で、B 系列の長い音形で文節末付近が平進に近くなるこ

とを述べたが、旧中村伊賀方言の場合、C系列の頭高形のHに続くL+が同様な長い平進形となる。

- (53) a. [オ]マイガ[イワツシャルヤニ 「おまえが(C)言われるように(A)」 p268  
b. [ス]ズメ[[ノ[コ]ガ 「すずめの(C)子が(B)」 p262  
c. [ミ]ルッ[テヤナ]マツリワ 「見る(C)というような(A)まつりは(?)」 p267

音韻句の区切りがないにもかかわらず次の文節頭が上昇しているように聞こえる発話例も、この型の後が多い。単に下降がなくなるだけでなく、(53)bのように、(45)の文末形に似た文節末の上昇もみられる。この文節末の平進あるいは上昇の実現は、2音節語での次の揺れを条件付ける要因になっているように見える。

- (54) a. [コン]]ダ 「こんどは(C)」 p260, p270  
b. [コン]][[ダー 「こんどは(C)」 p276  
c. [コン]ドナー [チョット 「こんどのは(C)ちょっと」 p282

(54)aでは、末音節の平調を実現するために早く下降を終えておく必要があるので第1音節が下降調となり、早く下降を終える。第2音節が長ければ第2音節内で昇調に転換できるし、3音節以上の文節では第2音節内で下降を終えられるので、頭音節は平調に近い。

(44)と(45)のC系列は、H+とL+という違いはあるものの、音節連続の平進という点では似ている。もうひとつの大きな違いは、(44)ではある文節末音節の下降が(45)ではなぜ消えてしまうのか、という点である。ただし、(44)の下降は、いわゆる「アクセント核」とは性質の違うものだということには留意が必要だと思われる。聴覚的な印象では、下降の幅も小さい。また、連文節構造をなす「句」の第2文節以降ではこの下降が消えてしまう発話も多い。黒木村宇賀のC系列との対応を考えると、この下降が「境界特徴」である可能性もある。黒木村のC系列が上昇メロディーで文節末音節が必ず高いのと比べ、(44)では、必ずしも「高い」とはいえない平進であり、下降開始位置も早まって緩やかになっている点を考慮すると、「境界特徴」の弱まった形とみることもできると考える。

#### 4.2.2 B系列の揺れ

(45)は2音節文節では第1音節、3音節以上の文節で第2音節の、それぞれ1音節だけが高いピッチ形である。浦郷式の諸方言とも似ているが、五箇式では3音節以上の文節で頭音節がLである点が異なる。(44)は、この頭音節のLは共通しているが、4音節以上の文節では第2音節から次末音節まで複数の音節にHが続く、という点が異なる。

旧中村伊賀の談話音声資料では、4音節の文節で2つのピッチ形の間での揺れが観察される例が2例ある。

- (55) a. ン[マゴ]ノ 「孫の(B) . . .」 p279  
 b. ン[マゴ]ノ [キー]トツケニ 「孫の(B)機嫌を(B)とるから(C)」 p280
- (56) a. イー]] フィ[ヨリ]デ]ゴザンス 「いい(C)ひよりで(B)ございます(A)」 p285  
 b. イー]] ヒ[ヨリ]デ]ゴザン [ノー]] 「いい(C)ひよりに(B)ですね(A)」 p285

もう1例は、下降位置というより上昇開始位置の揺れであり、どちらも文節末側の下降は2音節にわたる。この～ヨッタ形については、後述するが、2アクセント単位に分割されうる可能性があり、そうであれば(57)aが「統合」形、(57)bが「分割」形の揺れということになる。

- (57) a. ヤ[リ]ヨッタ]モン..ダ [ソー]]ダ 「[やった(B)もの(B)だそうだ(?)」 p266  
 b. [[ヤ(])リ]ヨッタ]モンデ 「やった(B)もので(B?)」 p267

揺れの例ではないが、4音節の文節で次末音節までHが続くB系列の例としては、ワ[カイ]]ト[キニ]ワ「若い(B)時には(B)」がある。

5音節以上の語でも、Hが1音節のみの場合と2音節にわたる場合があるが、いずれの場合でもそれに続く下降は2音節以上となり、5音節以上の文節で次末音節までHが続く発話例はみあたらない。(58)に2音節の例をあげる。(58)cは、～ヨッタの分割形であるとすれば、A系列である可能性がある。未然形・助動詞接続の4音節形であれば、A系列が予想される型である。

- (58) a. タ[ノミ]マ(ツ)]ス 「頼みます(B)」 p275,p277,p279  
 b. ソ[マツ]ナン]デ]ゴザンス]ダエド 「粗末なもので(B)ございますけれど(A)」 p286  
 c. シ[カラ]エヨッタ [モン]ダニ 「しかられた(B?)ものだよ(C)」 p261

第2音節が長音節の場合は、この音節全体が高平になる。

- (59) a. ニ[ジュー]ニン]]モ 「20人も(B)」 p262  
 b. ス[マン]ダエ]]ド 「すまないが(B)」 p281

音節数の多い文節では、下降の傾斜が文節末に向かうにつれて緩やかにはなるが、それでも最後まで下降が続くため、C系列との弁別は可能である。

- (60) ヒ[キ]ズリ]ダエ]]テ 「引きずり出して(B)」 p268, p269

文節が長くなると下降の開始が第3音節の後まで遅くなることがあり、文節末まで多音節にわたる下降がある、という点では、伊後方言のB系列は宇賀方言のA系列に似ているが、(56)bや(60)bのように頭音節から上昇する点はある点異なっている。談話音声資料には、3音節あるいは3モーラの文節で頭音節が高い例の出る語が3語ある。

- (61) a. [フィ]ル]ワ 「昼は(B)」 p268 cf. ヒ[ル]ノ p267

- b. [タ]ノン]] [ソ 「頼む(B)ぞ」 p281  
 c. [テン]キ]ガ 「天気(B)」 p265, p281  
 d. [テン]キ]ジャ 「天気では(B)」 p274

これらの例は、この方言の B 系列では頭音節が低いことよりも、文節末の下降が重視されていることを示しているようであるが、これには例外がある。(55)b のキー「気」のように、1 音節の文節は平調であり、下降調となる C 系列と対立する。ただし、この場合でも次文節との間には境界下降がある。これとの関連で、1 音節 B 系列のエー「柄」に、1 例であるが面白い例が出る。

- (62) エー[ワ]ジョー]ブジョル[ケ]ニー 「柄は(B)丈夫(C?)だから(A?)」 p274

この 2 音節文節には、文節内部の下降がなく、むしろ A 系列の語にも似てみえる。ただし、広戸・大原(1953:160)の比較データの中には、隠岐のすべての方言で「柄が」が H.L となっている。また、伊後の談話音声資料でも、(53)b の「子が」のように H.L のピッチ形も出ている。(62)のピッチ形には長音化や、あるいは助詞の「ワ」へのプロミネンス付与が関わっている可能性があるが、検証が必要なデータであると考えられる。

#### 4.2.3 A 系列の揺れ

まず、重起伏の有無について、同一話者の一つの発話で同じ語の発話例で両形が出ている例をあげる。

- (63) a. ゴトマキ[ナ]ラ ゴ]トマ[キ]デ 「五斗播きなら(A)五斗播きで(A)」 p258  
 b. ネ[ムリ]] [ネ]ムリー 「眠り(A)眠り(A)」 p261

(63)a では、いずれも次末音節が高い(44)のタイプのピッチ形であるが、最初の語形では語頭の H がない。(63)b では、最初の語形が 2 音節的に発音されている点と、前者で後部の H、後者で前部の H のみが現れている点で二つの語のピッチ形が異なる。前部については、ソリャのような A 系列 2 音節語の変異に準ずるとみられる。(50)a で A 系列の文節末側の H が出ない例が連文節の第 1 文節にないことを述べたが、次文節以降の「弱い」位置では比較的多く、(63)b の後分もこの例であると考えられる。

ただし、重起伏の有無は単純な二分法ではないと考えられる。(64)の第 1 文節は、母音の縮約によって文節長が変わっている例であるが、(64)b では重起伏が(64)a のように目立たないものの、頭音節がわずかに次音節より高いことが聞き取れる。

- (64) a. [ヨ]ロ[コン]デ]オ]ル[ワ] ナー 「喜んで(A)いますよ(A?)」 p285  
 b. ヨロ[コン]] ジョリマス 「喜んで(A)います(B?)」 p285

連文節構造の第 1 文節で、いちばん際立ったピッチ変位は、文節末側の H への上昇であ

ることは、次のような、L.L.H.H に聞こえる 4 音節文節の発話例でよく示されている。

- (65) a. コド[モノ]コ]モリオ 「こどもの(A)子守を(A?)」 p281  
b. アラ[レワ]テン]ポ 「あられは(A)たいして(?)」 p280

(65)a は、語頭の上昇が微弱な例である。第 3 音節の H のあと、末音節冒頭まで上昇が維持され、大きな下降は次文節との境界にある。(65)b は詠嘆的なイントネーションが加わっているとみられ、冒頭の 2 音節の L がより低められることにより、第 3 音節への上昇が際立てられているが、末音節への下降はほとんど目立たない。これらのピッチ形では、上昇の位置については(45)的、下降の位置については(44)的なピッチ形となっている。

(44)と(45)は、6 音節以上の文節で H の位置が 4 音節までか次末音節かの違いがあるが、これについても伊賀談話音声資料に揺れの例がある。

- (66) a. [カン]ヌ[シ[サン]]ガ 「神主さんが(A)」 p268  
b. カン[ヌシ]サンテ 「神主さんは(A)」 p269  
(67) a. オトコノ[コ]ダ]テテ 「男の子だ(A)と」 p285  
b. [オ]ト[コノ]コ]デ [ノー 「男の子で(A)ねえ」 p286

ただし、(66)b と(67)b は、共に文節が形態素境界で 2 アクセント単位 (神主(A)+さんは(?)、男の(A)+子だ(B)) に分割されている可能性がある。次にあげる(68)a もこのような例である。(68)b は、A 系列であれば 3 音節目に H があり次末音節から 2 音節の L が続く例となるが、このピッチ形も、形態素境界による分割である可能性がある。(64)b は ~ チョル形が分割されている例であるが、(68)c の ~ チョク形の分割は、後分が句として独立していることからはっきりわかる。

- (68) a. [ツ]ネ[ゴノ]ヤナモン]ダケ 「つねごの(A)ような(?)ものですから(B)」 p266  
b. ニョー[バ]シュー]ガ 「女房たちが(A?)」 p266  
cf. [[シャン[ムリ]ニョー]]バ[シュ]ガ 「しゃにむに(A)女房たちが(A)」 p268  
c. [イ]タ[ダエ] チョ[キ]マス]カイ ナ 「いただいて(A)おきましょうか(B)ね」 p286

B 系列の(57)で述べた ~ ヨル形の分割と統合の揺れの可能性は、A 系列でも以下の例に現れている。

- (69) a. [ワ]ラウイ[ヨツ]タ 「笑ったものです(A)」 p262  
b. キカ[シェ]ヨツ]タデスワ 「聞かせた(A)ものですよ(B)」 p264

しかし、このような形態素境界がなければ長い文節でも次末音節に H が置かれる。以下に、頻出の「使われる」の用例をあげる。

- (70) a. [ツ]カワ[レタ]カ ノ 「使えましたか(A)」 p275

- b. ツ[カ]ワ[レ[マシタ]モ 「使えました(A)とも」 p275  
 c. ツカワレ[タ]ヤ[ド]ゲ]ナヤ 「使えたか(A)どうか(?)」 p276  
 d. [[ヨー]]ツカ]]ワレマ]スワ 「よく(C)使えますよ(A)」 p276

連文節構造の第2文節である(70)dを除いて次末音節にHのピークがあるが、これへの上昇曲線は異なっている。はっきりした重起伏がある場合には語頭側のHの直後にピッチの底があるとみられる。

しかし、音節構造によっては、3音節文節でもA系列が重起伏のピッチ形にならず、B系列と似たピッチ形になる可能性がある。(71)は、第2音節が長音節となる3音節の動詞形で、広戸・大原(1953)によると浦郷・五箇ともにA系列と記述されている動詞であるが、いずれもこの長音節にピッチの高平部がある。

- (71) a. [メ]オ[[マウエー]テ 「目を(C)回して(A)」 pp271-2  
 b. コ[シエー]テ]モ]ラツ]タ]ニ 「作って(A)もらったので(A)」 p275

(71)aの頭音節マの上昇は、連文節構造で先行するC系列の末音節のLHによるものとみられる。末音節のテの下降自体は通常のA系列の末音節同様、幅が小さいが、文節境界を越えて次文節まで影響している。

(72)の揺れは、音節区切りの違いが関わっているとみられる。(72)aでは、カシが長音節扱いの3音節文節となっているとみられる。

- (72) a. ム[カシ]ノ]コト 「昔の(A)こと(B)」 p259  
 b. ムカ[シノ]モノ]ア 「昔の(A)ものは(B)」 p265  
 c. [ム]カシ[ノ]シキ]オ 「昔の(A)式を(B?)」 p272  
 cf. ムカシ[カラ] 「昔から(A)」 p267

1例、連文節構造の第1文節であるにも関わらず、ほとんど起伏がなく次文節への下降だけが聞き取れる実現例が一つだけある。音節構造でも説明できない揺れであり、上野(1989)で記述された中村方言のピッチ変異形を連想させるが、ほかにはこの位置での同様の中和現象は観察されなかった。

- (73) [コドモノ]<sup>6</sup>クー]]ヤツダ]ガ 「こどもの(A)食べる(C)ものだが(?)」 p279

#### 4.2.4 低起の動詞語形の活用型

(64)の、ヨロコブの連用形は、旧黒木村宇賀方言と異なり、A系列で出現している。しかし、宇賀方言では規則形のA系列で出ている、低起に対応する一段動詞の3音節の語形

<sup>6</sup> 先行のコマイ]]「小さい」との連文節構造の可能性はあるが、ピッチが高い。イントネーション?

では、以下の語で B 系列のピッチ形が現れている。このうち、(74)c は A 系列とも解釈できる可能性がある。

- (74) a. カ[ク]レ[チヨ]]ヤツ]オ 「隠れ(B)ている(B)やつを(?)」 p268  
b. カ[ク]レ[チャ ヤツ]オ 「隠れている(B)やつを(?)」 p269  
c. サ[ワイ]ジョッ[タ]ワ 「騒いで(C/A?)いたよ(B)」 p282  
d. [[ソナ]エ]テ [ク]ダ[()サイ]] 「供えて(B)ください(A)」 p284

宇賀方言で C 系列で出るツカマエルは、広戸・大原(1953)の五箇と同じく A 系列で出る語例がある。

- (75) [ツ]カ[マ]エ[チヨッ]テ 「つかまえ(A)ていて(B)」 p269

宇賀方言の(41)に対応して、ほぼ同じやりとりが伊後の談話資料にもある。5 音節となる敬語形は、やはり規則的な A 系列となる。

- (76) a. [モドッ]タ ゴー 「帰った(B)ぞ」 p282  
b. [モ]ドラシ[タ]カ ノー 「帰られたか(A)ね」 p282

ミルに対応するミサスは、3 音節の活用形の例がなく、長い命令形はやはり A 系列で出現している。デキルに対応するデキサスは、4 音節の連用形の例があり、連文節の第 2 文節の位置であり上昇が出ないためわかりにくい、下降曲線からみてやはり A 系列であるとみられる。

- (77) a. [ミ]サッ[シャ]イ 「見てごらんなさい(A)」 p275  
b. マゴサン]ガデキ]サシテ]ゴザンスッ]チヨイ [ノー  
「お孫さんが(C)お生まれになって(A?)いらっしゃる(A)そうです(?) ね」 p285

## 5 まとめと展望

前節では、『全国方言資料』の二つの談話音声資料を検証し、これらの方言のピッチ形が「アクセント核の位置対立」として分析できるか、「ピッチ形の対立」として分析すべきかを考える材料を提供した。いずれの資料でも「ピッチ変位の位置の揺れ」は観察されるが、旧黒木村宇賀方言については、これらの揺れや、下降の後のピッチ形の違いを、「基底形」におけるアクセント核の位置対立に還元し、それぞれの核の位置や音節構造に応じた音声実現の違いとして説明することもできなくはなさそうに見える。しかし、旧中村伊後方言については、同じ位置（たとえば文節次末音節）の下降に「種類の違い」を認める分析が必要になるとと思われる。とすれば、旧黒木村宇賀方言についても、「下降の種類の違い」(平進に終わる早い下降・平進に終わらない遅い下降・非下降+境界下降)の対立する体系で

あり、この種類が下降開始位置の違いとして実現している、という分析のほうが、隠岐の三型アクセント体系の共通性をうまく説明できると考える。

この観察は、児玉(2015)で提案した「原平安アクセント」が語声調であったとする仮説に基づいて 3.5 節で提案した「非アクセント核」仮説によるこの祖形からの隠岐アクセントの成立を支持するものである。これを、以下のようにまとめる。

(78) 原平安アクセント語声調 : \*H+, \*H+%, \*L+{, \*L+H(%)<sup>7</sup>, \*LH+, \*LH+%

(79) 隠岐語声調への改新

1): \*H+と\*H+%が下降調化, \*HL+ (急降調), \*H.H>>L (緩降調) に再編

\*H+と\*H+%の弁別は -1 類(\*H.HL)/2 類(\*H.L)以外は喪失

2): \*L+{ (2 音節以上)と\*L+H(%)が高起化し、語頭に L.L をもつものが\*HL+, L.L.L+をもつものが\*H.H>>L に分裂してそれぞれ高起の 2 型に合流

3): a. 低起に残った\*LH+と\*LH+%が、下降境界特徴をもつ\*LH+}として合流

b. \*H.H>>L と\*HL+の文節頭に LH の上昇。高起と低起の弁別喪失

1)~3)は段階的変化であるが、3)の a.の「下降境界特徴の発生」と b.の「高起と低起の弁別喪失」の間の因果関係については、児玉(2015)と同様に、二つが相関することの指摘にとどめる。1)と 2)を経た隠岐の体系では、H に終わりこの段階での下降境界声調発生の可能性があるのは、\*LH+類と\*LH+%類のみである。

1)は、語長に応じた類の分割であり、この点が奇異に見えるが、付属語がアクセントを失いすべて「順接化」する変化により、隠岐の祖形ですでに「文節性」が成立していたとみられるので、語長の異なる語が同じ長さの文節で「下降の種類」を区別した体系として説明することができる。「付属語」の型の喪失の位置付けについては、C 系列の境界声調が文節末に現れることを考慮して、3)に先立つ次のような段階を仮定する。

(79)' 隠岐語声調への改新 (付属語)

1a) 下降調化 (\*H>>L,\*HL+の成立) により「順接」と本来の低起の付属語の区別を喪失

1b) \*LH+%の境界特徴が脱落し付属語はすべて\*LH+に平進接続

これらの隠岐諸方言に共通の改新を経た体系は(80)のような語声調となる。

(80) 隠岐 3 型アクセント祖形

A 系列 (緩降調) : \*L.H>>L

B 系列 (急降調) : \*LH.L+

<sup>7</sup> 3 音節までの類別語彙からの再建であるが、動詞の活用形を説明するためには L+H 類(名詞 -5 類)でも名義抄式で有核となる L+H%と無核の L+H の弁別が必要となる。児玉(2015)と共通。

C 系列（上昇調）：\*LH+}

この段階で、付属語の高起と低起の区別はなくなり付属語はすべて順接する。A 系列の後では下降調、B 系列では低平調、C 系列では高平調となる。この結果、「文節性」と「系列性」を獲得していた隠岐祖形の変化は、すべて「N 型アクセント」かつ「語声調」としての変化であるとみなすことができる。

まず、『全国方言資料』談話音声の体系を語声調として解釈する。

(81) 旧黒木村宇賀方言

A 系列（緩降調）：L.(.)H>>L

B 系列（急降調）：LH.(H)L+（1 音節：LHL）

C 系列（上昇調）：L<<H}（1 音節：LH}）

唯一の非下降メロディーである C 系列の上昇曲線の自由度が増した以外は、隠岐祖形からの変化はほとんどない。C 系列の文節末側では、A 系列の緩降調との区別のため、境界声調が文節末まで非下降を保ち、次文節冒頭にのみ下降を実現することが多い。A 系列の H の下降開始は、文節長と音節構造に応じて 2 音節目か 3 音節目かが決まる。

(82) 旧中村伊後方言

A 系列（上昇調）：L<<H} ~ LHL<<H}

B 系列（下降調）：LH>>L（1 音節：LH}）

C 系列（平調）：L+!} ~ LHL+（1 音節：LHL）

A 系列は、隠岐祖形の「緩降調」の下降を遅らせ（て下降の傾斜を維持する）ための文節頭の非下降部が延伸し、下降部は事実上の下降境界声調として文節末（と次文節冒頭）にのみ実現する。C 系列は上昇性を失い、下降境界声調は文節末の下降として痕跡を残すのみとなる。この下降は、次文節まで影響を及ぼさないで下降を終える。この点を、「!」を付して示す。唯一の下降メロディーとなった B 系列は、下降曲線の自由度を増す。A 系列と C 系列は、非下降部に先立って文節頭に LH(L)をもちうる。

隠岐の三型アクセントを語声調（メロディーと境界特徴の組み合わせ）とみなし、メロディーの対立を維持しながらその位相を変えていった、という見方は、隠岐内部での他の体系の通時的变化にも、おそらく応用できる。一例として、知夫方言の二型化を再建する。

(83) 「原」知夫方言（再建形）

A 系列（上昇調）：\*L<<H} ~ \*LHL<<H}

B 系列（下降調）：\*H+L

C 系列（上昇調）：\*L<<H} ~ \*LHL<<H}

隠岐北端の伊後に対し、隠岐南端の知夫でも、A 系列では同様の「遅下がり」から「上昇調 + 下降境界声調」への変化が起きたと推定される。この方言では、C 系列の上昇性が保たれたため、A 系列と C 系列の弁別が維持できなくなり 2 型化した。(83)ではまだ交代形の段階として示した重起伏化は、この合流に先立っていたかもしれない。(5)を再掲した B 系列は、伊後方言と同様、他の下降メロディーとの対立を失うが、この方言では遅下がり化したとみる。

また、上野(1989)の記述による中村方言では、卓立文節の次文節で型の対立が失われ、卓立文節側の型によって語頭側が高い音形と語末側が高い音形によって実現するが、前者を卓立文節側の何らかの境界特徴(%<sub>x</sub>)の実現と解釈して表記すれば、次のようになる。

(84) 中村方言(上野 1989)の語声調としての解釈

- C(A 系列) (下降上昇調) : HL+H%<sub>x</sub>  
 B(B 系列) (下降調) : H+L%<sub>x</sub>  
 A(C 系列) (平調) : L+!

(82)の 2 種類の下降}、H>>L は共に次文節のピッチに影響を与えるものであり、%<sub>x</sub>をこれが次文節頭音節からのピッチとして実現する境界特徴に変化したものであるとみなせば、伊後と中村の二つの体系の関連も説明できる。B 系列の遅下がり、知夫でおきたと仮定した変化と似ている。

冒頭の(3)b が正しいという結論は、さらに一般化した「語声調体系から多型アクセントは発生しうるが、多型アクセントから語声調が発生することはない」という新たな仮説を生む。その意味で、アクセントの位置対立のある多型アクセントに囲まれた地域に分布する福井県の N 型アクセントは興味深い。多型アクセントが型の区別を減らして N 型になったという反証があれば、それはどんな変化だったのか、その結果アクセント核が性質を変えて語声調的性質を持ちえたか、といった着眼点がありうる。逆に仮説どおりに、やはりアクセント核を獲得できなかった「語声調」体系であるのだとすれば、日本語諸方言における位置アクセントの初期の成立過程を考える上で重要な手がかりを残していることになる。いずれにしても、今後の研究の進展を期待する。

談話音声資料の観察から明らかになった特徴としては、境界特徴のほかに、伊後方言の二つの系列での異音的な文節頭(あるいは句頭)の H の出現も注目すべき点であると考えられる。この種の揺れは、『全国方言資料』収録の日南市など、(一型を含む)語声調体系でしばしば観察される。このような揺れがどのような条件で起きるかをさまざまな談話音声資料で検証することが、多型アクセントも含めてさまざまな体系で見出される語頭隆起の過

程の解明にとって重要であると思われる。

## 参考文献

- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-65.
- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店. 281-321.
- 上野善道(1983)「隠岐島久見アクセント再論(1)」『言語学論集'83』65-77.
- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 2 記述的研究 編』明治書院. 167-209.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道(1989)「隠岐島中村方言のアクセント交替」『国語研究』52. 1-24.
- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16-1.44-62.
- 川上薫(1975)「隠岐五箇村久美方言のアクセント体系」『国語学』105.35-43.
- 川上薫(1983)「アクセントにおける位置の対立」『国語研究』46.51-61.
- 金田一春彦(1972)「隠岐アクセントの系譜」『現代言語学』三省堂. 615-650.
- 児玉望(2012)「屋久島の二型アクセント 自発談話音声資料の韻律分析」『音声研究』16-1.119-133.
- 児玉望(2015)「九州におけるアクセント変化の再建 境界特徴に着目して」『音声研究』18-3.27-42.
- 新田哲夫(2012)「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16-1.63-79.
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』4. 1-61
- 早田輝洋(1977)「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店. 323-360.
- 早田輝洋(1983)「五箇村久見方言の名詞のアクセント」『文学研究』80.71-83.
- Haraguchi, S. (1977) *The tone pattern of Japanese: an autosegmental theory of tonology.* Kaitakusha.
- 原口庄輔(1978)「隠岐島五箇村久見方言音調のオートセグメント分析」『国語学』114.(1)-(20).
- 原口庄輔(1979)「日本語音調の諸相」『言語の科学』7. 21-69.
- 広戸惇・大原孝道(1953)『山陰地方のアクセント』報光社.
- 松倉昂平(2014)「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35. 141-154.
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』第8巻 辺地・離島編